響き

森野　水琴

彼は子どもの頃の音楽の教科書を取り出して歌詞を熱心に読んでいる。唱歌として習った歌は特に念入りに読む。
悪貨が良貨を駆逐するかのように、粗野な言葉づかいが美しい日本語を過去のものにしていく。
忘れられてしまった美しい響きを探し求める旅が始まる。

彼は源氏物語の桐壺の巻の冒頭の一文を古語で読んでいる。
平安時代の宮中の女性が朗読するのを想像しながら読んでいる。
何度も何度も読み返し暗記していく。
きっと美しい響きだったろうと想像しながら暗記していく。

彼は源氏物語の口語訳を朗読したものを何度か聞いたことがある。
本で読むと相当な時間を要するが、通勤電車で何日もかけて聞き終えた。
朗読者の声が心地よかったのも成功理由と言えよう。
同じ朗読者が平家物語の原文を朗読している。
これも勉強と、彼は何度も聞いていく。

彼は万葉集を学び始めた。
万葉仮名とは言うが漢字である。
同じ音を何種類もの字に書き分けたようで興味深い。
文字と音が織りなす世界を彼は楽しんでいる。

彼は源氏物語を古語で暗唱することに決めた。
どれだけ時間がかかろうとも暗唱したい。
暗唱しながら美しい響きが再現できると彼は確信している。